氏　　名　野津　亮（のつ　あきら）
学位(専攻分野)　博　士（情報学）
学位記番号　情　博　第　160　号
学位授与の日付　平成17年3月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　情報学研究科システム科学専攻
学位論文題目　共感的コミュニケーションのための概念ネットワークモデルの構築

論文調査委員　（主査）教授 片井　修　教授 熊本博光　教授 松田哲也

論文内容の要旨

共感形成のための新しい方法論の構築を目的として，自己の利益をなげうってまで他者を援助するような行動を誘発する，「共感」の自他非分離的な特性の背後にある深層構造について検討を加え，それを踏まえて看護ケアや教育についての議論を展開している。社会学的立場からの議論では共感については自己の利益の追求の結果の帰結としての利他的行動として取り扱うが，体系的にこのような行動について記述し，援助するためには「共感」という現象そのものについてより詳しく議論する必要がある。そこで，本研究では哲学をはじめ，看護学，社会心理学などを参照することで，価値観や動機付けの必然性を客観的に表現するモデルとして概念ネットワークモデルを提案している。これらに基づいて共感形成を援助し，深い意味での他者理解を達成する方法を明らかにしている。本論文は8章からなる。

1章は序論であり，本研究の背景，意義，概要と目的および論文構成を示している。

2章は，「共感」という主観的な現象をいかに客観的に評価するかについて検討し，客観性を保障するための言語構造の在り方について着目している。ソシュールの差異の体系やヴィトゲンシュタインの言語ゲームなどを参照することによって，概念形成の根拠を与え，共感的な他者関係の形成を基礎付ける看護理論や，人間の普遍的性質を探求する社会心理学における認知均衡理論を参照することによって，他者理解の手がかりとその分析方法を明らかにしている。

3章では本論文で用いた基礎理論の説明を行っており，様々な看護理論，対人関係分析手法，社会心理学等について詳しく紹介している。

4章は，人間のメタ認知的な関係構造理解の分析法として，言葉構造に内包される論理的関係をベースとして，二者間の対話構造をIPM（Interpersonal Perception Method）や認知均衡理論に基づいた新たな分析方法を導入して，その構造の特性を明らかにしている。さらに，これを一個人の価値軸を表現するモデルに拡張するために，共感形成の基となる自己概念構造の分析の手がかりとして，ケアの立場から人間自体についてシステム論的展開をしているロイ適応看護理論に基づいて整理している。

5章では，認知均衡理論をハラリーらの研究をベースに三項関係以上に拡張することによって，人間の価値観の優先順位の構造表現を与え，自己についての概念ネットワークモデルを新たに提唱している。この概念ネットワークモデルはラベルつき有向グラフであり，このグラフの認知的均衡状態についての議論を展開することにより，ケアの形態を5つに分類している。

6章では，提案した概念ネットワークモデルを看護の視点から捉え，近年注目されている自己物語を通しての人間理解の方法と対比しつつ，概念ネットワークモデルの特性をコンピュータシミュレーションや被験者を用いた実証的検討により明らかにしている。

7章では，概念ネットワークモデルを時空間的視点から捉えなおし，より深い人間理解を達成するために，ライプニッツの提唱する時空間概念をもとにモデルを再解釈し，得られた主観的な空間を取り扱うための枠組みとしてファジィ理論を導

入して検討を加えている。また，様相論理を参照することによって概念ネットワークモデルに時間軸を導入する方法についても深く検討している。

8章は結論であり，本研究で得られた成果を総括し，今後の研究課題を展望している。

論文審査の結果の要旨

本研究は人間における「共感」現象を明らかにすることによって個人と個人を紡ぐメディアの構築を目指したものであり，情報の受け取り方にまで考慮した，深い情報交換のあり方を探るものである。現象学とロイ適応看護理論やハイダーの認知均衡理論等を基礎理論とし，人間における「共感」の持つ意義について深く考察し，共感形成をサポートする方法を提案，実装を行っている。これらについて以下の5点を軸に研究が進められている。

1．共感形成という主観客観を内包する問題に対するアプローチとして，現象学をベースとした根本的な視点から問題に取り組んでいる。人間の性質である概念形成について，現象学のみならず，ソシュールやウィトゲンシュタインなどを参照し，深く考察している。

2．間主観と主観とのズレにより生じる葛藤状態について，その構造をInterpersonal Perception Methodにより整理し，そこから推察できる人間の葛藤をロイ適応看護理論を用いて分類し，ケアの枠組みを提供している。

3．葛藤状態をグラフとして表現するために，素朴心理学を導入している。そして，概念同士の関係を3項以上に拡張することによって概念ネットワークモデルを構成し，効果的にケアするための手法を考慮するために重要となる「多様な価値観」を認知均衡の優先順位という一つの視点から導いている。

4．導かれた概念ネットワークモデルの認知均衡という視点から，ケアという概念について大きく5つのパターンに分類し，認知均衡の適用によるケアとは何かについて明らかにしている。

5．効果的なケア手法とは何であるかを探るために，提案する概念ネットワークモデルを，近年注目を浴びているナラティブセラピーと比較し，シミュレーション実験やモデルの現実への適用することによって，概念ネットワークモデルの示す意味やその有効性を示している。

以上，本論文は共感形成のための基となる，他者理解に関する新たな枠組みを提供している。よって，本論文は博士（情報学）の学位論文として価値あるものと認める。

また，平成17年1月27日実施した論文内容とそれに関連した試問の結果合格と認めた。